

## 第14回 豊川流域圏自然再生検討会 議事概要

開催日時：令和3年9月29日（水）14:00～16:15

開催場所：WEB会議

### 1. 開 会

### 2. 挨拶（豊橋河川事務所 所長）

### 3. 議 事

#### （1）第13回 豊川流域圏自然再生検討会 主な意見と対応

事務局より説明した。意見等なし。

#### （2）豊川自然再生事業の概要

事務局より説明した。委員からの主な意見は、次のとおり。

##### <ヨシ原再生>

- ・本川、放水路においてヨシが分布する地盤高を整理しているが、自然分布箇所と造成箇所は区別して整理しているか。  
→ヨシ原再生の地盤高の条件を整理するにあたり、本川、放水路ともに自然分布箇所のみを整理している。（事務局）
- ・ヨシ原の再生目標面積は、第8回の自然再生検討会の審議において、放水路完成後の昭和40年代に存在していたヨシ原14.4haを参考にすることとしたが、昭和23年代に存在していた17.6haに到達しなくても問題は無いのか。  
→施工面積としては、自然再生計画書上のヨシ原再生目標面積である10.03haが達成できれば問題は無い。自生及び自然拡大分も含めたヨシ原再生面積としては、検討会でのご助言に基づき、放水路が無い時代の17.6haを目指すのは困難であることから、放水路が完成していた時代の14.4haを参考に評価している。（事務局）
- ・自然再生事業スケジュールに事業再評価の時期を記載すると、来年度以降の参考になる。
- ・事業の価値を評価する上で、周辺住民の事業に対する評価を把握する必要がある。令和5年度の再評価に基づきその後の計画を検討するとよい。

##### <干潟再生>

- ・平面流況解析の結果から、干潟再生計画箇所として設定している止水域は概ね妥当であると思われる。止水域に発生する出水ピーク時の流向は、中州の本川側に向いており、放水路から中州に土砂が堆積する原因となっていると考えられる。
- ・干潟の河床変動を考察するのであれば、摩擦速度 ( $u^*$ ) 等も考慮する必要がある。流速差だけで堆積・洗堀傾向を表現するのは難しく、説明の図として適切ではない。流速が

早い・遅いという表記に修正するとよい。

→ご指摘を踏まえ、表現を改める。(事務所)

- ・干潟の土砂量と前年最大流量との関係図について、R2年の流量は間違っていないか。前年の流量が多いと土砂量が多い傾向は合っていると思われるが、流量が少ない年は説明が難しい。

→データを確認する。(事務所)

- ・河口部干潟から流出した土砂は、昭和40年代に存在していた河口部沖側の干潟再生に寄与していると考えられているが、干潟再生で投入した土砂量に注意して考察する必要がある。
- ・干潟の造成材を採取している豊川放水路分流堰上流付近は地形的に土砂が溜まりやすく地形変化も大きい。干潟に到達する迄の土砂収支をマクロに捉えて土砂の堆積状況を把握できるとよい。
- ・干潟の粒度組成は、本川側は細砂が多く、放水路側は細粒分が少ない。上流からの土砂供給に変わりがないとすれば、流れが影響しているのか、それとも潮汐が影響しているのか。

→最高水位が高い年は中砂以上の粒径の割合が高い傾向がみられている。流量と粒径の関係は今後も丁寧に解析していきたい。(事務所)

- ・本川と放水路とでは、河床材料の運ばれ方がおそらく異なっている。本川側の土砂移動は簡単な次元解析でも想定できるのではないか。もしくは、河床材料を見るだけでも本川側と放水路側で供給される粒径が推測できる。
- ・ハマグリと底質の経年変化の関係について、細砂分の増加に伴いハマグリが増加していると考察されているが、必ずしもそのようには見えない。アサリ、ハマグリと底質粒径との相関図は、自然干潟と施工干潟に分けて示すと、新しく施工した場所の特性が明らかになる。また、底質の指標として一般的な強熱減量、空隙率等のデータも活用して多角的に生息状況を整理した方がよい。

→ご指摘の点を踏まえ、整理方法を検討する。(事務所)

#### <アサリ着底稚貝調査>

- ・今回や既往の調査結果から、着底稚貝の生息状況について、ほぼ毎年同じ現象がみられることが分かってきた。特に稚貝の初期着底期の餌料がその後の稚貝の生残に影響することが明らかになってきたが、餌料となる0.2~20 $\mu$ m弱のピコ・ナノプランクトンが河口部でよく発生する理由については科学的に未解明であり、今後の調査検討に期待したい。本調査で得られている他の水質項目と合わせて多面的な解析をしてもらいたい。
- ・既往知見によると、底質の空隙率が高い地点では底質下層でもアサリが確認されている。稚貝の底質中における鉛直方向への移動については、文献調査も含めて来年度も継続して調査を行う必要がある。
- ・3月に河口部で着底稚貝が増加しており、この時期は稚貝の生息に重要な時期であるので、餌料環境の調査を3~4月も2回実施できると、ピコ・ナノプランクトンの増殖理

由を考察する際の参考になる。

- ・冬場の河口域におけるアサリの生残を検討するためには、冬季についても月 1 回の調査頻度では少ないので、今後検討する必要があると思われる。

#### 4. 閉 会

以上